

暖地におけるアイリス球根の養成について（第2報）

岡迫 義孝・高八重一純
（宮崎県農業試験場）

1958～1960年にわたり、アイリス球根養成のための植付深度に関する試験を行ったので、その結果を第2報として報告する。供試圃場の条件は第1報と同じ。

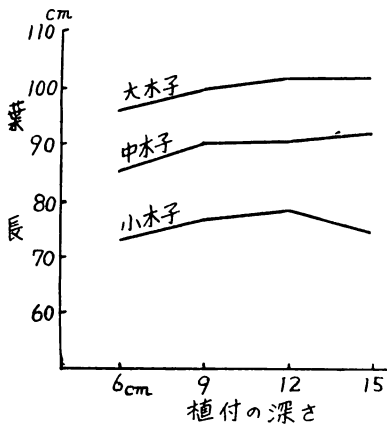
試験方法

供試品種 ウェッジウッド 当场産の木子を用い、重量によって大木子（4.5～5.0g）、中木子（3.0～3.5g）、及び小木子（1.5～2.0g）に分けて供試、1958年と1959年は植付の深さを6、9、12、15cmの4段階、1960年は4、10、15、20cmの4段階とし、株間9～12cm、9月中旬に植えつけ翌年5月上旬に掘りあげた。

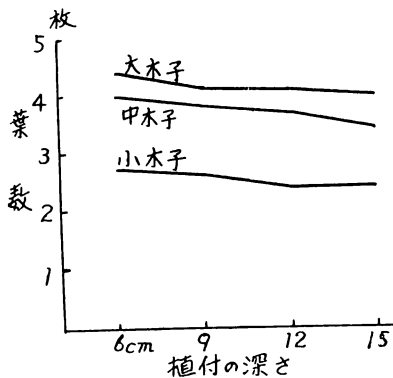
成績及び考察

地上部の生育 地上部の生育が、最大期に達したと

第1図 植付の深さと葉長との関係（3月30日調査）



第2図 植付の深さと葉数との関係（3月30日調査）

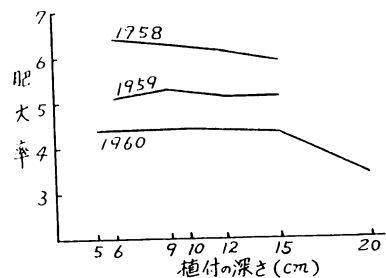


思われる3月30日調査の葉長及び葉数を示すと第1、2図の通りである。

深植区は、一般に葉数が少なく葉長が長くなり、かつ葉巾もせまく草姿は立性となるが、浅植区は開張性で、葉数多く葉巾も広いが葉長は短くなる。しかし小木子の場合、これとやゝ趣を異にし15cm区は12cm区よりも葉長短かく、深植の害が明らかに示されている。

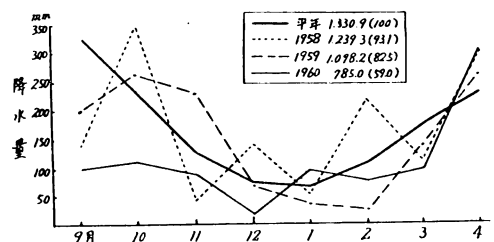
球根の収量 球根の収量をかんとんに植付時の木子重が、収穫時において何倍に肥大していたかという肥大率で比較すると第3図の通りで、球根の肥大に影響を及ぼしたと思われる降水量は第4図の通りである。

第3図 植付の深さと主球の肥大率との関係



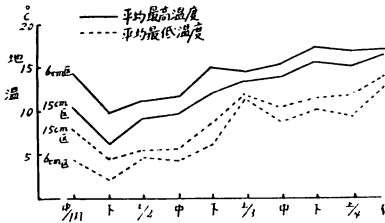
この結果をみると、植付の最適深度は年によって異なり、1958年は6cm 1959年は9cm、1960年は10～15cmであった。これは、第4図をみると明らかなように、栽培期間中の降水量の多少に影響されたものであって、降水量の多い場合すなわち圃場水分の十分な時は浅植がよく、反対に降水量の少ない場合すなわち乾燥しやすい圃場では、あるていど深植にすべきであるということを示すものである。

第4図 栽培期間中の降水量

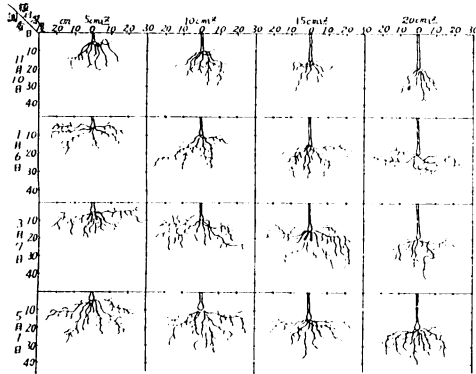


以上のことからして、アイリス球根の肥大は原則的には浅植を好むものと考えられるが、これをうらずけるために圃場の地温と根群の分布を調査した結果は、第5、6図の通りである。

第5図 アイリス圃場の地温



第6図 植付の深さと根系との関係



地下6cmと15cmの地温を比較すると6cmの方が最高温度の平均2.3°C高く、最低温度の平均では逆に1.5°C低く結局日平均では6cm区の方が0.8°C高くなっている。次に根群の分布をみるに、アイリスは一般に浅植性で本年のように乾燥の年（降水量は平年の59%）でも根は深く伸びずに、植えられた位置より下方20~30cmの厚さに横に広く分布し、乾燥に弱いことを示している。従って植付の深さによって根の伸びる範囲が定まり、深植区は根群の位置が深層となるため酸素や太陽熱を十分に利用できず、球根の肥大が劣るものと考えられる。

主球の形状 球形指数（横径/縦径）でみると、浅植の場合は長形は深植の場合は丸形になる傾向が認められる。

第1表 球形指数 (1960)

植付深度	5 cm	10	15	20
木子の大小				
大木子	1.41	1.43	1.40	1.29
中木子	1.46	1.37	1.33	1.36
平均	1.44	1.40	1.37	1.33

木子の収量 第2表の通りで、浅植区ほど木子の収量は多くなる。

第2表 1株当木子収量 (1960)

植付深度	5 cm	10	15	20
項目				
個数	3.20	2.93	2.83	2.75
重量	7.1g	6.2	5.4	4.3

促成能力 1960年植付、1961年収穫した球根を各区同一大きさのものを50球ずつ供試、8月10日より8~10°Cで50日間冷蔵した後6月30日に植えつけた。結果は第3表の通りで、植付後10月一ばいは20°C以上の気温が続いたために全般に開花率は低かったが、15cm植区が最も開花率が高く、球根の肥大が十分に行われなかった極端な浅植または深植に、促成能力に対しても悪影響を及ぼすようである。また草姿においても、植付の深さに比例して深植区は葉数が少なくなり、草丈は伸びるという球養成中の草姿と同じ傾向が認められた。

第3表 異なる植付深度によって養成された球根の促成能力

調査項目	球根の促成能力								
	開花率	プライント	欠株率	平均開花日	開花期間	葉数	葉長	花莖長	
植付深度	cm	%	%	%	月日	日	枚	cm	cm
5	10	56	34	11.8	2	4.7	40.7	40.5	
10	30	60	10	11.8	11	4.6	41.5	39.1	
15	44	40	16	11.8	14	4.5	40.2	41.0	
20	16	66	18	11.10	9	4.3	46.7	49.8	

結論 以上の結果からして、球根養成の場合の木子の植付深度は、原則的には一応浅植の方がよいと考えられるが、しかし球根の肥大は土壌水分に敏感であるために、栽培圃場の水分条件によって植付深度をかえるべきで、水分豊富な水田裏作では5~10cm程度の浅植とし、乾燥しやすい畑では10~15cmの深植にするのが好ましいと考える。